INTERNATIONAL & INFORMATION STUDIES

新潟国際情報大学

[本校] 〒950-2292 新潟市みずき野 3-1-1
tel. 025-239-3111 fax. 025-239-3690
[新潟中央キャンパス] 〒951-8068 新潟市上大川前通 7-1169
tel. 025-227-7111 fax. 025-227-7117
http://www.nuis.ac.jp somu@nuis.ac.jp

平成18年7月20日 発行

Vol.31

学報
国際・情報

チャレンジ精神で溌剌と

情報文化学部長 槻木公一

今から4年ほど前の晩秋、北京師範大学を訪問して本学の派遣留学中国コース15人の学生の勉学の様子を視察しました。留学して3カ月、そろそろホームシックの気配が漂っているかなとちょっと案じていたのですが、皆の溌剌とした元気さにこちらが圧倒されたのを覚えています。

実際には、日本を離れて異文化の中で生活をし、日々勉学を続けているのですから、それぞれつらい場面があったとは思います。しかし、そのような状況に置くことを自ら決断した学生のチャレンジ精神とエネルギーが、苦労を喜びや自信に変えさせたのでしょう。私には留学経験がないので、これから留学する皆さんに有意義なアドバイスをすることはできませんが、私事ながら本学に赴任する前に、10年間担当した中国鉄道部との政府開発援助という仕事の経験の話が少しは役立つかもしれません。

全員で修了証書（中国）

異文化を理解する

伝統料理祭り（韓国）

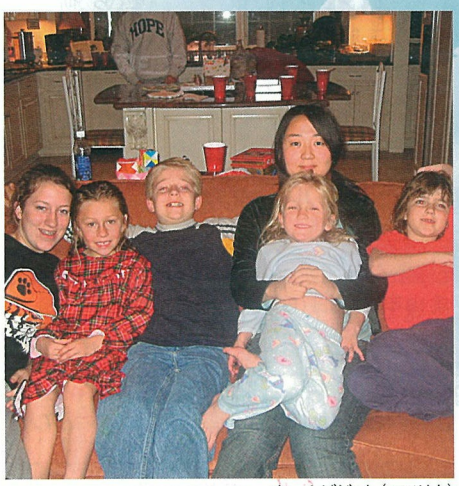
派遣留学 夏期セミナー

1週間から1カ月程度、北京滞在を繰り返して、鉄道のIT化教育プロジェクトを進める仕事でしたが、制度、商習慣、価値観、ものの考え方の違いなどから当初は大きなカルチャーショックを受けました。しかし、プロジェクトの完遂という共通の目的のためには何が必要か、何をすべきかを考え、相手チームと徹底的に討議しました。私として得られた大きな成果は、結局は文化の違いがあっても、相手を理解することと信頼することの大切さを学んだことです。

柔軟な思考ができてファイトがある学生時代に、海外で長期に生活し勉強することは、語学を学び、異文化を理解するのに最善の機会でしょう。相手の文化の理解というのは、相手の人を理解する基盤であると思います。同時に、相手からも自分を理解してもらわなければ相互理解になりません。そのためには、どういう主張、行動そして価値観が求められるかをよく考えてください。

この留学経験が人生の貴重な1コマとなることを願っています。

最善のチャンス



ホームビジット（アメリカ）

大自然を満喫（カナダ）

CONTENTS

2・3面
海外派遣奨学金授与式と壮行会
出発を前に期待のひと言集
今年度の派遣日程・参加学生の累計
米ミズーリ州立大から2先生が来学・寄稿
国際交流インストラクター2年目の活躍
国際交流フェアを終えて

4・5面
平成19年度入試日程概要一覧
オープンキャンパス・NUIS-LIVE案内

6面
私の研究テーマ（2教授）
教員の活動（2006年上半期）
トピックス・進路ガイダンス
・スポーツ大会報告
・同窓会総会
お薦めBook

7面
シンポジウム特集
「いまアジアで」―東洋大学と共同開催

8面
卒業生の便り（特集）
コートジボアールの虎さん
3大学合同で海岸清掃
湧源・編集後記に代えて

素晴らしい挑戦に期待膨らむ

4カ国のコースに8月から出発

派遣留学 海外夏期セミナー 壮行パーティー開く

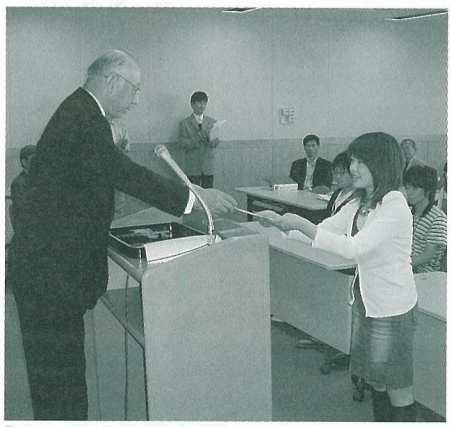
派遣留学・海外夏期セミナーに出発する学生を激励する奨学金授与式と壮行パーティーが6月14日、みずき野本校の大会議室と国際交流センター留学交流スペースで行われました。

今年度の派遣学生はカナダ・アルバータ大学3人、アメリカ・ノースウェスト・ミズーリ州立大学7人、韓国・慶熙大学5人、中国・北京師範大学9人の合計24人。8月6日から9月にかけて順次出発します。今回はロシア・極東国立総合大学はたまたま派遣該当者が無く見送られました。

奨学金授与式では出発順に全員が担当教授から紹介され、各コースの代表が武藤輝一学長から証書が贈られました。学長は「国によって事情は違うが、勉強はもちろん平素の生活について先輩の報告書などを読んで参考にしていることと思う。できるだけ日本の歴史を勉強して出発に備えてほしい。多くの人々と交流し勉強以外のことも多く学んできてほしい。まずは健康第一、そして気をつけて行動を。元気で頑張って、なおいっそうの研さんを積み、大いに成果を挙げて帰るように期待しています」と激励。さらに事前研修を積み2カ月後に出発を控えた学生たちは、あらためて心を引き締め、期待に胸を躍らせていました。

続いて開かれた壮行パーティーでは学長、学部長はじめ情報文化・情報システム両学科長、国際交流・学習指導両委員会の教職員、事務局関係者らも駆けつけ、思い思いにテーブルを囲んでドリンク片手に歓談。各コースの学生代表が決意を述べるたびに大きな拍手を送っていました。

間もなく出発。話もはずむ



「頑張って」「ありがとうございます」

激励と決意と――ひと言集

槻木公一学部長
「留学というアグレッシブ（積極的）な青春の挑戦は素晴らしい。苦難を乗り越えて貴重な思い出をたくさん残してきてほしい。体調に気をつけて元気で頑張ってきてください」

田村孝平事務局長（乾杯）
「目の前に刻々と迫る新しいチャレンジに期待と不安はあろうが、すべての課程の無事な終了を楽しみに皆さんを送り出したい。健康と成果とを期待し乾杯」

安司幸也・カナダコース代表
「今回はホームステイに一番興味がある。現地の人々と文化に直接触れることのできる多くの交流は、紙の上では学べないものだ。世界の学生たちと国境を越えてコミュニケーションを楽しみ、日本人としての自覚を持って多くを学んできたい」

猪一樹・アメリカコース代表
「言語や文化を超えた交流をするということの意味の大きさを学び多くのことを得てきたい。他国のアビリティー（能力）を学んで日本とを結ぶ力とする、無限大な力を秘めた有意義な留学にしたい。日本代表としての意気込みで頑張りたい」

細田千佳子・韓国コース代表
「5年前に話しかけられジェスチャーで答えることしかできなかった。この時からハングルを読み理解できるようになりたいと思った。日韓では竹島（韓国名・独島）など困難な政治的課題を抱えているが、両国の関係改善に少しでも力になりたいと思っている」

小林智彰・中国コース代表
「漢字なら簡単と考えていたが、略字や発音が難しいと分かって、ぜひ流暢に話せるようになりたいと留学を決意した。上達すると楽しいしうれしい。中国語検定に挑戦して自分の力を客観的に試してみたい。あまり力みすぎず、肩の力を抜いていろいろな体験をしてきたい」

〈海外留学・セミナー参加学生の累計〉

	中国	韓国	ロシア	アメリカ	カナダ	計
平成 7年度	29	14	7	13		63
8年度	15	13	20	17		65
9年度	31					31
10年度			7	14		21
以上 海外研修計	75	27	34	44		180人
12年度	30				20	50
13年度	15	12	6	17	14	64
14年度	17	9	3	13	17	59
15年度	（中止）	4	1	11	6	22
16年度	31	7	2	13	8	61
17年度	18	13	5	12	22	70
18年度	9	5	0	7	3	24
計	120	50	17	73	90	350人
合　計	195人	77人	51人	117人	90人	530人

平成18年度スケジュール（出発順）

平成18年6月14日現在

国名／留学大学	留学期間	参加人数
カナダ アルバータ大学生涯教育学部	平成18年8月 6日（日） ～9月10日（日） （5週間）	情報システム学科 2年次学生 2人 情報文化学科 4年次学生 1人 計3人
アメリカ ノースウェスト・ ミズーリ州立大学教養学部	8月20日（日） ～12月17日（日） （17週間）	情報文化学科 2年次学生 7人
韓　国 慶熙大学国際教育院	8月31日（木） ～12月29日（金） （18週間）	情報文化学科 2年次学生 5人
中　国 北京師範大学歴史学院	9月 3日（日）～ 平成19年1月 7日（日） （18週間）	情報文化学科 2年次学生 9人
参加学生数合計		24人

国際交流インストラクター

情報文化学科4年・松山恭子

国際交流インストラクターを始めてから早くも2年目を迎えることができました。本学と新潟県国際交流協会が協力して発足した同事業は、本学から15人の学生が子どもたちに世界の現状や歴史を伝える「国際交流インストラクター」に選抜され、泉田知事から委嘱状をいただきました。小中学校の総合学習や地域の学習会などに派遣されて活躍し、多くの方から高い評価をしていただくことができました。

昨年はたくさんの不安を抱えながらも、8月には万代島美術館で開催された写真展「地球を生きる子どもたち」のワークショップを成功させることができました。今年は約30人の学生が集まり、素晴らしいワークショップができるように頑張っています。

自分も学び広がる世界観

JICAの方を招いて研修会

私はワークショップをすることも初めてで、どうすれば私たちの思いを伝えることができるのかとても悩みました。ワークショップの対象は小・中学生だったので、あまり難しい言葉は使わないように、また子どもたちが理解しやすいように皆でアイディアを出し合いました。皆で頑張った分、皆と仲良くなり充実感を得ることができました。そして何より自分も学ぶことで世界観が広がりました。

今年はJICA（国際協力機構）の方やワークショップのファシリテーター（進行役）の方を招いて、昨年よりも本格的にインストラクターの資格取得の研修に取り組んでいます。今年度のテーマは平和と人権。研修会ではタイで活躍する青年海外協力隊員2人から国際協力の実態などを学びました。9月までの研修期間中にタイを訪問し、2人に再会し現地での活躍ぶりを視察する計画もあります。

国際交流フェアを終えて

情報文化学科3年 **和田真澄**（韓国コース）

国際交流フェア（4月17日―5月17日）を終えて、正直ほっとしました。実際にやることは難しくはありませんでしたが、掲示物の作成と発表会の準備に思った以上の時間がかかってしまいました。また掲示物を作成する場所や保管場所の確保ができずに困りました。掲示物は見やすいように大きめの紙で作成していたため、場所をとり各自で保存することができず大変でした。

発表は韓国伝統楽器の紹介を中心に報告をしました。一番大変だったのは、より多くの人に見に来てもらい、いかに興味を持ってもらえる発表をするかということでした。そのために私たちは、韓国で習ったサムルノリという楽器を演奏することにしましたが、その伝統楽器の調達が大変でした。また、見ていても飽きないような発表を心がけました。例えば、五感で楽しめるように韓国の伝統菓子の試食やお茶の試飲を用意しました。それから、説明や解説はなるべく簡単に分かりやすく、楽器は演奏するだけでなく、見にきてくれた学生たちや先生方が実際に触れられるようにしました。その結果、思っていた以上に人が集まり有意義な報告ができたと思います。

貴重な体験を形にできた

準備は大変でしたが留学の体験を形にできたことは、私にとってはよい思い出になりました。

ノースウェストミズーリ州立大から 2先生が来学、交流

本学留学プログラムアメリカコースの提携校であるノースウェストミズーリ州立大学から、人文学部助教授マイク・スタイナー先生が客員研究員として5月6日から27日まで滞在されました。また、9日から11日まではESL（English as a Second Language）のコーディネーターであるジェフ・フット先生も来学されました。フット先生は、学生リクルートのため韓国にご滞在中、立ち寄られました。

お二人とも本学教職員、学生と積極的に交流され、ノースウェストから本学への学生派遣を含め、6年目を迎えるプログラムの発展に向けて話し合いました。

昨年の留学生と昼食会の後で。右端がスタイナー先生、左端がフット先生

相互学生派遣へ絆深める

歴史学助教授 **マイケル・スタイナー博士**

短期間の新潟滞在は何度も経験している私ですが、今年5月、新潟国際情報大学の客員研究員として過ごす機会に恵まれました。新潟ではさまざまな経験をしましたが、貴学訪問の主な目的は3つありました。

第1に、半期性に移行したノースウェストミズーリ州立大学派遣留学プログラムへの参加学生と交流を持つこと。そのため、授業やガイダンスでプレゼンテーションを行い、学生に情報を提供し、議論の場を持ちました。実際に彼らと会い話しをして、プログラムの成功をあらためて確信しました。

第2に、ノースウェストの学生を貴学へ短期間派遣する可能性をめぐって、教職員の方々と話し合いの場を持ったことが挙げられます。私の同僚でありノースウェスト留学プログラムの責任者であるジェフ・フット氏も、話し合いの場に同席してくれました。計画はまだ端緒についたところですが、皆さんから積極的かつ熱心な反応を得たことに、フット氏ともども意を強くしました。ノースウェストの学生が日本文化を学ぶ場として、新潟が最適の地であることは疑いがありません。

最後に、日本の学生にアメリカ文化を教える効果的方法を探るため、地域のリサーチに時間を用いました。貴学に提供していただいた仮住まいの周辺で日本の日常生活に触れ、また第二次資料を利用することで、日本人の感覚・観点からアメリカ文化の中心的要素を理解する枠組みを発展させることに努めました。学者がアメリカ文化を教える際に用いる技法は、アメリカ的観点・世界観にあまりに深く根づいていることがままあります。ひとつの文化が世界を見る際に用いるレンズは、その国の特徴を研究する上で決定的要素となりますが、特定のレンズのみを通して外国人学生に文化を教えることについては、教師は用心深くあらねばなりません。私としては、日本特に新潟で得た経験を生かして、貴学学生がノースウェストで学ぶ際、日本人に分かりやすい形でアメリカ文化を教えられるよう、カリキュラムの更なる向上に努めたいと考えています。

貴学で過ごした時間は、私にとって大変貴重で楽しいものでした。新潟国際情報大学の教職員の皆さんとの間に築いた絆を、今後いっそう強めていければと思います。最後に、今回私が滞在するにあたってお世話になった方々に、心より御礼申し上げます。

スポーツ大会を終えて

スポーツ大会実行委員長　情報文化学科3年　斉藤　巧一

基本マナーを守ろう

天気に恵まれ盛り上がる

皆さん、スポーツ大会お疲れさまでした。今年度の大会は5月16日に行われましたが、今回は新しく屋内競技の卓球を取り入れてみました。皆さん多数の参加に私ども実行委員会一同うれしく思います。皆さんはどのように感じましたか？今回スポーツ大会で友達ができましたか？新しい交流は生まれましたか？―など実行委員長として皆さんに聞いてみたいことはたくさんあります。

今年は天気に恵まれ、まさにスポーツ大会日和ともいえる素晴らしい天候でした。多数の皆さんに参加してもらって例年以上の盛り上がりだったと感じます。

しかし、問題もありました。特に喫煙やごみに関しての問題が数多く見られました。例えば、決められた場所以外で喫煙を行なう、吸い殻を吸い殻入れにいれない、正しくゴミを捨てない、などこのような問題は毎年起こっています。私は実行委員長を2回経験しています。しかしこのような問題はなくなりません。スポーツ大会はスポーツだけ行なっていればよいというものではありません。そのことを心にとどめておいてほしいと思います。スポーツ大会は成功だったと思いますが、しかし依然としてこれからの課題が浮かび上がった大会でもありました。来年度にはこのような問題がなくなるよう、しっかりとした体制づくりの必要性を感じました。

自分に合った選択を助言

進路ガイダンス開く

高校生、ご父母を対象とした進路ガイダンスが4月29日(土)、本学本校で開催されました。このガイダンスでは、高校卒業後の幅広い進路選択の中から、自身に合う進路選択の参考にしていただけるよう毎年実施しています。

まず「進研プレス」編集長の関一憲氏が「自分に合った進路選択」について講演を行いました。第2部では、新潟県教育委員会高等学校教育課企画振興係指導主事の山賀淑雄氏、日本文理高校進路指導部の田中誠氏、セコム上信越株式会社執行役員総務人事部長の阿部賢一氏、進研プレス編集長関一憲氏、それに本学の近藤進学生部長もパネリストに加わり、さまざまな角度から進路についてのアドバイスを行いました。

そして第3部では、本学の学生8人が実際の大学の授業、課外活動など学生生活について自身の体験などを踏まえながら、先輩としてアドバイスを送っていました。

参加者からは、進路を考える際のプラスとなった、漠然としていた進路が見えてきた―などの感想が聞かれました。

在学生からアドバイスを受ける参加者

新潟中央キャンパスで同窓会総会

本学同窓会「みずき会」（高橋毅会長・2657人）の平成18年度総会が6月24日、新潟中央キャンパス9階ホールで開かれました。100人を越す卒業生とOB教員、教職員らが出席し、高橋会長が新会員を歓迎し、会のますますの発展を期して挨拶。また武藤理事長・学長が大学の近況を織り交ぜ祝辞を述べました。

新年度の事業計画では学園祭のいっそうの協力と、本校みずき野キャンパスとJR赤塚駅周辺のクリーン作戦を、昨年以上に盛り上げ実施することなどが承認されました。

引き続いて懇親会が午後7時から7階のバンケットホールに会場を移して開かれ、お互いの近況を話し合い母校の発展を期して時間を忘れるほど盛り上がりました。

アットホームな雰囲気の懇親会

高校生はじめどなたでもご参加できます！

OPEN・CAMPUS 2006
オープンキャンパス
2回目 10/1(日)
10:00～15:30

学科及びカリキュラム説明
入試情報説明
入試問題の傾向と対策
模擬講義
コンピュータ実習
語学体験
個別入試相談
就職相談
海外留学相談
学生との懇談
学内見学

NUIS-LIVE
大学ではどんなことを学ぶの？
NUISの特色ある講義を体験しよう！
1日体験入学
日程／8月18日(金)
時間／10:00～14:50

講義内容
●企業と経済　●人工知能　●中国文化論　●政治学
●CEP入門　●行動科学　●日韓朝関係論
●専門演習ー情報とシステムー
●「ワークショップ」で平和学！

◎会　場　本校みずき野キャンパス
新潟市みずき野3-1-1　TEL 025-239-3111　JR越後赤塚駅下車徒歩7分
※変更となる場合もありますので、事前にご確認ください。

参加お申し込み・お問い合わせ　新潟国際情報大学　広報係
〒950-2292　新潟市みずき野3-1-1
TEL.025-239-3111 FAX.025-239-3690
E-mail soudan@nuis.ac.jp

お薦めBook

本学図書館のWEBサイトに個性あふれる教員たちの紹介文が載っています。アクセスしてみてください。
<http://www.nuis.ac.jp/ic/library/book/book2005.htm>

「巨匠とマルガリータ」（上・下　2冊）

ミハイル・ブルガーコフ著
法木綾子訳
群像社（2000年）

名高いロシア作家ブルガーコフ著の傑作「巨匠とマルガリータ」は私の最も好きな作品だ。この小説を初めて読んだのは、学生時代である。それ以来5、6回読み返した。ロシア各地には「巨匠とマルガリータ」のファン・クラブも設置されている。

作品のマジカルな魅力にひかれた読者は、定期的に集会を開き、登場人物などについて語り合う。本作は2000年にポーランドで、20世紀における世界最高の文学作品として認められた。05年にはロシアで映画化されたが、この話題作の視聴レーティングは全国で29%、首都モスクワではセンセーショナルな58%に及んだ。

小説の内容は？――ある日の夕方、モスクワの並木道にやや変な、外国人らしい男が姿を現す。色の違う目をしているし、時としてアクセントの強い、めちゃくちゃなロシア語、時として完璧なロシア語をしゃべる。話の内容も変だ。1804年に亡くなったドイツ哲学者カントとの会見を回想する。話し相手の文学雑誌編集者が、近いうちに珍しい処刑を受けると予言する。「あなたは若い女性によって首をチョン斬られます！　このことについて、キエフの叔父に至急に電報でも打ってあげましょうか」と。数分後、引き揚げた編集者は足を滑らせ、路面電車にはねられ首をチョン切られて死んでしまう。この恐ろしい事故は、路面電車の若い女性運転手にショックを与える。予言が見事に実現したことを目撃した詩人は、変な外人を捕まえるよう努力するが、失敗して頭がおかしくなり、精神病院へ運ばれる。

20世紀前半、悪魔が連れ立ってモスクワを訪れる。市民たちの日常生活にはおかしい、時として恐ろしい出来事が始まるのだ。

（情報文化学科・教授
アレクサンドル・プラーソル）

「北方の夢」

豊田有恒著　祥伝社（1999年）

むかし、テレビが普及していなかったころのこと。毎夕6時ごろラジオで子ども向けの放送劇がありました。その中に「緑のコタン」という1年もののドラマがありました。幕末から明治初期のアイヌの少年とトーマス・ライト・ブラキストンという英国人の物語です。

ドラマの詳細は忘れましたが、この中にエドモントンが出てきます。緑のコタンは書き物として残っていませんが、ブラキストンの伝記歴史小説が「北方の夢」です。アイヌの少年は登場しませんし、エドモントンも数回出てくる程度です。軍人・探検家・博物学者・商人である主人公が、幕末から明治にかけて日本で活躍した？物語です。ブラキストンラインに名前を残しており、生物学をやっている人なら知っているかもしれません。

小説なのでどこまでが史実かという点はありますが、幕末から明治にかけて日本に大きな影響を与えた人物のひとりです。皆さんのご両親に「緑のコタン」という放送劇を知っているか聞いてみてください。

（情報システム学科・
教授　近藤　進）

■平成19年度　入学者選抜試験概要（要約一覧）

※詳細は平成19年度募集要項で確認してください。

入試区分		募集人員		出願期間	試験日	試験地	試験実施教科・科目	合格者発表日
推薦入学試験	高校長推薦指定校制	情報文化学科 10 情報システム学科 20	30	18年11月1日(水)～11月7日(火)			本学が指定校と定めた高校長あてに推薦依頼を行います。	18年11月16日(木)
	高校長推薦公募制	情報文化学科 30 情報システム学科 35	65		18年11月12日(日)	新潟	面接・小論文 学力推薦要件／全体の評定平均値3.8以上又はいずれか1教科の評定平均値4.5以上であること。	
	高校長推薦スポーツ	情報文化学科 情報システム学科	若干名				面接・小論文 対象種目については募集要項で確認ください。	
一般入学試験	前期	情報文化学科 35 情報システム学科 60	95	19年1月9日(火)～1月22日(月)	19年2月2日(金)	新潟 上越	・国語:国語総合(現代文)・現代文 ・数学:数学Ⅰ・数学Ⅱ (数学Ⅱは、微分・積分を除く) ・外国語:英語Ⅰ・英語Ⅱ 上記3教科の中から2教科を試験場で選択	19年2月7日(水)
	大学入試センター試験利用	情報文化学科 15 情報システム学科 20	35	19年2月1日(木)～2月15日(木)	19年1月20日(土)、21日(日)の入試センター試験を受験していること		学科試験を課さず、19年度のセンター試験の成績で判定。全教科の中から2教科2科目選択 配点:各教科100点。 (3科目以上受験した場合は高得点の2教科2科目を合否判定に使用)	19年2月23日(金)
	後期	情報文化学科 10 情報システム学科 15	25	19年2月16日(金)～3月2日(金)	19年3月9日(金)	新潟	・国語:国語総合(現代文)・現代文 ・数学:数学Ⅰ・数学Ⅱ (数学Ⅱは、微分・積分を除く) ・外国語:英語Ⅰ・英語Ⅱ 上記3教科の中から2教科を試験場で選択	19年3月13日(火)
社会人入試		情報文化学科 情報システム学科	若干名	18年11月1日(水)～11月7日(火)	18年11月12日(日)	新潟	面接・小論文	18年11月16日(木)

本学独自の奨学金制度（給付）

- ●学費特別給付奨学金（全学年対象）授業料全額又は1/2
- ●表彰奨学金（2～4年生対象）10万円
- ●海外派遣留学・海外研修奨学金（2年生対象）15万円～23万円
- ●資格取得奨励奨学金（全学年対象）Ⅰ種5万円、Ⅱ種2万円
- ●学費臨時給付奨学金（全学年対象）授業料・施設設備費の当該期分全額又は1/2
- ●学費奨学融資制度奨学金（3・4年生対象）借入利息相当額

◎入試と奨学金の詳細については事務局までお問い合わせ下さい。　TEL025-239-3111　E-mail gakumu@nuis.ac.jp

私の研究テーマ

朝鮮現代史の生き証人

情報文化学科・助教授　吉澤文寿

私は朝鮮現代史、日朝関係史、特に現代における植民地主義、植民地支配責任の問題にかかわるテーマについて学んでいます。現在は1965年の日韓国交正常化およびそれを前後する時期の外交文書を分析して、研究を進めています。そのことと底流で関連することですが、4月からの本学への赴任以前に東京で続けていて、新潟に来てからも続けたいことがいくつかあります。その一つが歴史の生き証人に会って話を聞くことです。

東京の東村山市に多摩全生園というハンセン病患者療養施設があります。その施設に暮らしているのはいずれもご高齢の方ばかりですが、その中に在日朝鮮人の患者も何人かいます。私たちは1月1日の昼前にJR新秋津駅前に集合してから、全生園で暮らす在日朝鮮人の方々のお宅を「アポなし」で訪問します。そして、たまたま在宅中のお宅におじゃまをして、新年の挨拶のついでにお話を伺います。そのときに私たちは苦労話やら自慢話やら、彼らが話したいことをとにかく聞くことになりますが、それがお互いにとって楽しみになっているようです。ちなみに、不在のお宅には「あけましておめでとうございます」と書いた紙にメンバーの名前を連署して、玄関の戸に挟んでおきます。

実はこのメンバーの中心は元立教大学山田昭次ゼミの皆さんです。この方々は多摩全生園の在日朝鮮人に対する聞き取り調査を行ない、1989年に『生きぬいた証に―ハンセン病療養所多摩全生園朝鮮人・韓国人の記録』（緑陰書房）という本をまとめました。そして、この本が出版された後も、元旦に訪問したり、焼き肉パーティーを開いたりして、証言者の方々とのつながりを保っています。私は3年前から元旦訪問に参加しています。

私はどのようなテーマで朝鮮史を学んでいても、このような歴史の底辺でしたたかに生きる朝鮮人の存在を忘れないようにしたいと思っています。

システムシミュレーション

情報システム学科・講師　佐々木桐子

「システムシミュレーション」というと非常に複雑で、分かりにくく、硬いイメージを持たれるかもしれません。だからこそ、単純で、分かりやすく、親しみやすいものとしてとらえる工夫が必要になります。

私はこれまでその工夫の一つとして、ちょっとした道具を使ってきました。それが「Arena（アリーナ）」というシミュレーションソフトウェアです。この道具は、例えるなら「鉛筆」のようなもの。「鉛筆」は、文字を書いたり、計算をしたり、絵を描いたり、そしてときには転がして運命を判断したり…。実はArenaもまったく同じ使い方をします。プログラム（文字）をかき、計算をし、アニメーション（絵）を動かし、そして判断材料となるさまざまな情報を提供します。

実際、この道具を使って経営資源となる人、物、金、情報の流れを研究してきました。具体的には、企業の中の生産システムや流通システム、社会の中の道路交通システムなどを対象としてきました。最近では、大規模な組織改編を控えたシステムの物資の流れを、改編前と改編後で比較してみたり、空港の新ターミナルビル建設に伴う交通流の変化を検証してみたり、といった具合です。

もう一つ私が力を注いでいることは、この技術をどのように伝えていくのかということです。どんなにすばらしい鉛筆を使っても、きちんと練習をしなければ、きれいな文字を書くことも、早く正確な計算を行うことも、見事な絵を描くこともできないのと同じように、道具を正しく使い、結果を正しく理解し、正しく判断する練習をしなければなりません。やはりここでも、「単純で、分かりやすく、親しみやすいものとしてとらえる工夫」が必要になります。

教員の活動（2006年上半期・本人申告による）

1）研究論文・図書

臼井陽一郎（情報文化学科・教授）

- 共著（2006）「持続可能な発展と気候変動：環境と国際機構」庄司克宏編著『国際機構』岩波書店（145-163頁：総頁226頁）。
- （2006）'The Roles of Soft Law in EU Environmental Governance: An Interface between Law and Politics'.『日本EU学会年報』第26号（20-62頁）。
- （2006）'New Modes of Governance and the Climate Change Strategy in the European Union: Multi-level Norm Seeker under the EU Climate Change Programme -- Green Politics on Global Warming, an Aspect of Regionalism'. In Tamio Nakamura ed., Designing the Project of Comparative Regionalism. Comparative Regionalism Project No.1, ISS Joint Research Project No.14. Institute of Social Science, University of Tokyo, pp.41-54.

苅部恒徳（情報システム学科・特任教授）

- （2006）『「ベーオウルフ」の物語世界―王・英雄・怪物の関係論』松柏社（全236頁）。

高橋正樹（情報文化学科・教授）

- （2006）「近代化直前のタイの伝統的国家構造―19世紀前半のバンコク王朝圏の中央地方関係―」『東洋大学アジア地域研究センター学術フロンティア報告書2005年度』（81 - 103頁）。

吉澤文寿（情報文化学科・助教授）

- （2006）「日韓会談研究の現状と課題」『歴史学研究』第813号（48-55頁）。

2）学会・研究会報告

越智敏夫（情報文化学科・教授）

- 「文化と政治」地域文化学会公開セミナー（中央大学駿河台記念館、2006年4月1日）。

近藤　進（情報システム学科・教授）

- 「情報インフラと災害に対する情報通信への課題（新潟県）」信越情報通信懇談会新世代情報通信網委員会2005年度委託研究報告（メルパルク長野、2006年6月8日）。

3）その他

近藤　進（情報システム学科・教授）

- 特許取得　S.Kondo et al. "Semiconductor Optical Devices and the Fabrication Method"　Patent No. US 6,982,469 B2 (Date of Patent Jan 3, 2006)

武藤輝一（学長）

- （2006）「外科侵襲と生体反応－SIRS，CARSとMODSをめぐって－」『新潟県医師会報』671号（2-5頁）。

吉澤文寿（情報文化学科・助教授）

- （2006年2月11日）「日韓正常化交渉　日本も文書を公開せよ（私の視点 ウイークエンド）」『朝日新聞』。
- （2006）「在日朝鮮人史100年と日韓会談文書公開」『Let's』（日本の戦争責任史料センター）第50号（5-8頁）。
- （2006）「日本の朝鮮植民地支配責任の現状と課題―日韓国交正常化交渉とその後」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』（東京外国語大学）第116号（56-57頁）。

シンポジウム「いま、アジアで」

東洋大学と共同開催

7月1日新潟中央キャンパスにて

―国家を越えた交流を深める東アジア―

経済交流、民主化、地方分権化…

本学と東洋大学アジア文化研究所アジア地域研究センターの主催で、「いま、アジアで―国家を越えた交流を深める東アジア―」と題したシンポジウムが7月1日、本学の新潟中央キャンパスで開催されました。

両大学では数人の教員を中心に、東洋大学の学術フロンティアプロジェクトを契機に過去4年の研究交流があり、その一環として今回のシンポジウムが企画されました。当日は学生と一般市民など150人近い方々が会場を訪れ熱心に聴講していただきました。

アジアの現状をできるだけ分かりやすくお伝えすることを目的として、経済的な関係を深める東アジア地域の交流と、民主化や地方分権化について取り上げました。本学の長坂格助教授の総合司会のもと、まず武藤輝一学長が開会のあいさつ、東洋大学アジア地域研究センター長の比嘉佑典教授がシンポジウムの趣旨説明をしました。第1部では4人が報告し、第2部では本学の越智敏夫教授が報告者にコメントし、さらに報告者に参加者からの質疑に答えてもらいました。ここに4人の報告者の内容を簡単にお伝えしたいと思います。

（情報文化学科教授・高橋正樹）

関心の高いテーマに聞き入る参加者

広がる地方分権の波

東洋大学アジア文化研究所研究員・法学部教授　佐藤俊一

1980年代に入ると我が国を含むアジア諸国にも、地方分権化の波が押し寄せてきた。世界的な地方分権化の高まりの背景には、中央政府の策定した画一的な開発計画を忌避して、地域の実情にあった自主的な開発や地域づくりを求める声の高まりと、中央政府の財政危機という二つの共通した要因がある。

これに対して、東アジア諸国の地方分権化は、アジア型権威主義体制の崩壊に伴う民主化に連動している。アジア型権威主義体制とは国家主導型開発体制である。そこには開発至上主義、国家主導型の経済開発、権威主義的政治体制、そして形式的な議会制民主主義の形をとっているという特徴がある。

東アジア諸国では、この国家主導型開発体制が崩壊して民主化が進行し、それに地方分権化が共鳴することになった。ここでいう民主化とは、政治的抑圧からの解放すなわち政府批判の自由と政治参加の自由と理解する。民主化をもたらした要因は、開発主義にある。国家主導の開発によって、中・高学歴を有し所得水準の中位である新中間層が形成され、それが国家主導型開発体制を倒すという結果になった。

しかし、ここで注意すべきは、新中間層の形成が一義的に民主化を促進するわけではないということである。民主化と地方分権化とがなぜ連動するのかを考えてみたい。その理由の第1は、経済成長が都市の発展をもたらす一方で、農村との格差を拡大し、地方や農村の不満を拡大させたことが挙げられる。第2に、地方分権化が地方分権を促進することが挙げられる。すなわち、首長公選制や議会選出制が地元住民の利害を重視する立場を拡大強化したのである。

東アジアで民主化に連動した地方分権化が定着するか否かは、税財政の分権化にかかっている。わが国でも長らく3割自治といわれたが、実際に調査した韓国、台湾、タイ、インドネシアの市町村レベルの財政基盤は脆弱で1割自治にも満たない状況である。

タイの新中間層と民主化運動

新潟国際情報大学教授　高橋正樹

今回の反タクシン運動に一気に火がついたのは、今年1月にタクシン首相が自分の通信事業の会社の持ち株会社株を全部、シンガポールの会社に売却することが明らかになった時である。これに対して首相は、民意を問うというかたちで2月24日に下院を解散、4月2日には総選挙を実施したが、野党は選挙をボイコット。選挙は野党候補者がいないまま実施され、国王が選挙のやり直しを促し、選挙の無効が裁判所によって決定された。

この政治的混乱の社会的背景として、グローバリゼーションによって深まるタイ社会の分裂がある。85年のプラザ合意の円高によって、タイは日本をはじめとする外資を積極的に受け入れて、輸出志向型工業化を推し進めた。その結果、自動車産業や電子産業が発展し、米輸出国というイメージは一変した。

首相は、警察官から通信事業に転身し巨額の富を手にした。通信事業は政府の許認可事業であり、政治家とのコネクションが重要であったため、98年にはタイ愛国党を結成し党首になった。当初は斬新、改革、グローバリゼーションというイメージを打ち出したが、すぐに軌道修正し、グローバリゼーションに見捨てられたと感じている農民や中小企業に接近していった。2001年の選挙では、一部資本家層の支持を獲得し、さらに中小企業や低所得者層に配慮した政策を掲げて、単独過半数を獲得した。

他方で、タクシンへの批判は、マスコミ弾圧、グローバリゼーション政策、利権の親族や友人との独占、低所得者層への所得再分配、麻薬撲滅政策の人権侵害、そして、南部のイスラム教徒への強硬政策への反発が挙げられる。しかし、世論調査では、社会分裂を背景にその低所得者層支援策が功を奏して、タクシン首相は40％近い支持を獲得している。

東アジアでは益々、経済的統合が進むであろうが、タイに見られるように国内の不平等構造を固定化させかねないので、東アジアの経済的統合は、同時にそれぞれの国内の不平等を解消するようなものでなければならない。

日韓を結ぶ市民交流

新潟国際情報大学助教授　吉澤文寿

近年の日韓関係は、靖国神社参拝問題、独島（竹島）問題でギクシャクしているといわれる。日韓国交正常化40年、日本敗戦・朝鮮「解放」60年、韓国保護国化100年という記念すべき年である2005年には、韓国政府は日韓国交正常化に関する公文書を全面公開したが、日本政府はこの動きに応答しなかった。01年の扶桑社版歴史教科書問題を契機に始まった政府主導の日韓歴史共同研究会においても日韓間の不調和が現れている。

その一方で、01年の教科書問題以降、日韓の市民交流、学術交流が盛んに行われている。主なものに、1984年に発足した「比較史・比較歴史教育研究会」があり、97年から始まった東京学芸大学とソウル市立大学による「日韓歴史教科書シンポジウム」がある。さらに、もっとも特記すべきは02年3月から翌年8月まで日本・中国・韓国3国の研究者、教員、市民らによって「歴史認識と東アジアの平和フォーラム」が開催されたことである。また、戦後補償問題でも、政府よりも市民の方が積極的に対応している。

近年、とりわけ韓国の知識人から、日韓各国におけるナショナリズム批判が相手国のナショナリストに歓迎されることで、双方のナショナリズムが強化されるという「敵対的な共犯関係」論が提起されている。林志弦（イム・ジヒョン）氏は『植民地近代の視座』で述べているように、「敵対的な共犯関係」を解体するために、「国史」のパラダイムをさらけ出して解体すべきことを提案している。韓国における過去清算や教科書批判、そして日本における植民地支配責任の追及は、ナショナリズムそのものに対する否定というよりは、ナショナリズムを利用した民主主義的な活動と理解すべきではないだろうか。「過去清算」ないし「植民地支配責任」の問題がナショナルな基盤なしに成立し得ないという点を考慮すると、これらの問題解決の見通しがついた段階で、民主主義を伸張させるための新たな枠組みが追求されるべきであろう。

日本・中国・台湾関係の二面性

東洋大学アジア文化研究所研究員・法学部教授　後藤武秀

東アジアの隣国である日本・中国・台湾は、近くて遠い国、すなわち経済的には相互に密接な関係を有しながら、政治的には対立と融和を繰り返して今日に至っている。

1976年に毛沢東が死去し、文化大革命が終結すると、中国と台湾との関係も変化を見せ始めた。鄧小平の改革解放政策によって、中国が導入しようとした外資は、香港経由の資本であったが、じつはそこに蓄積されていた資本こそが台湾の資本であった。結果的に、外資導入により改革解放をしようとした鄧小平の経済開放政策が、中国と台湾との関係を修復する上で重要な意味をもつことになった。他方、台湾は86年に初めて「大陸探親」を目的とする台湾人の大陸訪問を解禁した。さらに、91年には中華民国憲法を改正して、もはや中国共産党は反乱団体ではないと認めた。これによって台湾からの中国への投資は一層促進され、中国に流入する資本の40％以上は台湾資本であるといわれる。他方、民主化の進む台湾では96年に大統領が国民の直接選挙によって選出され、さらに台湾独立の動きを強め中国政府は強くこれに反発した。

日本、中国、台湾の経済関係には、生産活動の移転と連携が見られる。すなわち、日本経済は戦後の復興期に、労働集約型の産業である繊維産業、プラスチック加工等が経済を牽引したが、高度経済成長期を過ぎるとこれらの産業は人件費の抑制を求めて、台湾に生産の場を求めるようになった。さらに90年代になると台湾でも人件費が高騰して、これらの産業は中国大陸へと生産の場を移した。そして、台湾では最先端の科学技術産業が展開され、比較的技術水準が低くなった先端産業は、中国へと移転されるようになった。

このように日本、台湾、中国の間の経済的な関係が深まり人の移動も活発になると、もはや政治的な対立を言っていたのでは経済のスピードについていけなくなることを台湾も中国も意識する必要がある。同時に、日本は韓国も含めた東アジア経済が既に一体のものとなりつつあることを理解しておかなければならないであろう。

本学と新潟大学、県立女子短期大学の3大学合同の海岸清掃活動が6月18日に四ツ郷屋浜、25日には小針浜で行われました。この活動は3大学共同プロジェクトの一環で「にいがたなかよし」を発足させ今年で3年目となりました。

今年は例年より1週間早い取り組み。18日は各大学の地域の海岸を同時刻に一斉清掃、25日には3大学合同で小針浜を清掃し、互いの状況を報告し合いました。この活動を通して参加者に環境問題に対する関心を持ってもらうこと、地域の人たち参加者と交流を深めることを目的としています。

もっと参加を、地域交流を

3大学合同で海岸清掃

18日の四ツ郷屋浜清掃は、今年は浜から海岸沿い道路402号線も含めて行いました。道路沿いにはタバコの吸殻が多く捨てられていました。浜には空き缶やお菓子の袋、ハングルが書かれた容器も落ちていました。集合場所としてご協力いただいた「浜乃家」には清掃終了後にスイカをご馳走になりました。8月の初旬にはさらに多くのゴミで浜が汚れてしまうとの話しを聞き、もう一度清掃活動を実施しようと思っています。

（情報システム学科3年・山際　佳）

今年も「じゅうじゅう祭り」を新しい役割分担、新しい1年生を迎え実施しました。役割分担では新メンバーや1年生が積極的に動いてくれました。しかし今回は「なかよし」全体の意識の薄さを感じました。学内でも静かで、一般参加者も少しでした。イベントは何事も継続が大事だと思います。今年の反省を生かし、来年も多くの学生と社会人が交流できるイベントだという事を忘れずに続けてほしいと思っています。

（情報文化学科3年・五十嵐美紀）

卒業生の便り

情報文化学科2000年度卒業　深川 虎次郎

コートジボワールで活躍中

みなさんこんにちは。私は2004年9月末から西アフリカのコートジボワール共和国のアビジャン市で暮らしています。そうです。あの原口武彦先生が授業の際に、スライドを使って説明していたあの国です。

私は現在、コートジボワール国立大学付属大学フランス語学習センター（CUEF）で、フランス語を勉強しています。CUEFはフランス語圏以外の国から学生を受け入れていますので、たくさんの国の人と知り合うことができます。ほとんどは英語圏アフリカ諸国（ナイジェリア、ガーナ、シエラレオネなど）からですが、それ以外にも中国、ブラジル、アルゼンチン、アメリカ、カナダなどからも学生が来ています。学校は月曜から金曜までの午前8時から午後2時ぐらいまでの計6時間ほどあり（水曜日と金曜日は午後の授業なし）、みっちりフランス語を勉強しています。そして、たくさんの宿題が出されるので、毎日大忙しです。

学校以外での活動では、2000年の紅翔祭の際に上映した映画「車に轢かれた犬」の監督のモリ・トラオレさんのNGOで週2回、日本語を教えています。生徒はコートジボワール人の10代から60代までとさまざまですが、皆授業や仕事の合間をぬって参加してくれます。授業の進むスピードは日本の日本語学校より遅いのですが、理解はしてもらっているようなので個人的には満足しています。

それから、学校が休みの際には、卒業論文でも書いた西・中部アフリカ11カ国によって運営されていた多国籍航空会社エールアフリック（Air Afrique）の調査も行っています。最近は、主にエールアフリックの倉庫で資料収集をしていますが、滞在中にそれらの文献を使って、文章をまとめられれば良いなと思っています。アビジャンで、原口先生の書いた「アビジャン日誌」に載っていたジュラ語（コートジボワールの商業言語）の単語を使ってみると、実際に通じたので、感動しました。

それ以外にも、アジア人はめずらしいので、よく話しかけられます。一番良く言われるのは、「お金がほしい」や「持っているものが欲しい」です。いくら論理立てて断っても、スッポンのごとく喰らいついてきます。まれに、それらをうまくかわせる時があり、その時はうれしいです。そのような具合に楽しく、健康に暮らしています。

現地発のブログとHPが大人気

アキエ族の人たちに親しまれている虎次郎さん（左から2人目。アウエ村で）

「今日のコートジボワール」のブログ：http://blog.yahoo.co.jp/airafrique101/
ホームページ：http://www.geocities.jp/airafrique101/

湧源 YUUGEN

編集後記に代えて

広報委員長　越智　敏夫

戦後日本漫画史における金字塔のひとつは、いうまでもなく松本大洋の「ピンポン」である。その主人公ペコの有名な台詞に「あつがなついぜっ」というものがある。「夏」が「あつ」でも、「暑い」が「なつい」でも、そんなことはどうでもいいと思えるほど、たしかに日本の夏は暑苦しい。

しかし考えてみれば、この季節を「なつ」と呼ばないといけない理由はあるのだろうか。日本で一番気温の高い時期を「ふゆ」とか「はる」とか「あき」という音で呼んだとしたら、それは多くの混乱を引き起こすだろう。しかしそれら3つの名前で呼ばない限り、おそらく混乱はない。つまり「なつ」と呼ぶべき論理的必然性はない。概念としての暑い季節と「なつ」という音の間には何の関連性もない。

このように概念と音の関係を恣意的なもの（つまりいい加減で無根拠なもの）と考えるところから、ある種の現代思想は生じている。しかしそういう「軽い論理」は嫌われる。人々は語源とか根拠とか、そうした「盤石なもの」を欲しがるからだ。吉本隆明がどこかで書いていたように、山奥に住んでいた太古の日本人が艱難辛苦の果て、初めて海岸線にたどり着いたとき、そのあまりの感動から「うむ」と唸り、そこからあの巨大な水たまりを「うみ」と呼ぶようになった、というのはオヤジギャグとしては面白いが、何にでも無理に根拠を見出そうとする姿勢は見苦しいほどではないか。「日本語の起源は○○語だ」などという話もよく聞くが、ではその○○語はどこから来たのか。そのことを考えればこうした言説も酔っ払いの戯言としては面白いが学問的には無価値だということはすぐに分かる。こうなると、物事の根拠など問わないほうが幸せになれるのではないかとさえ思えてくる。本欄の「湧源」という題名も私は語源を知らない。でも困ることは何もない。もうこのあたりで根源や始原など、そういう大げさなものを捜し求めるという作業はやめてみたらどうだろうか。

今年の夏も暑そうだし。